

村岡花子著「岡村花子エッセイ集、腹心の友たちへ」河出書房新社 2014 年 2 月 28 日刊を読む

すべてのことが忘れ去られた後に残る一つのもの、それが教育だ
—学ぶ生活—

1. 長いあいだ翻訳を仕事として来た私は、さまざまの辞書や辞典を座右から離したことがない。一つの言葉がはっきりしないために、何冊の辞書を引くかわからない。考えられるだけの方法のすべてをつくしてその小さい一つの言葉の意義をきわめるのだが、何日かかかってついに、求めている正確な意義を自分のものにした時の喜びは比較するものがないくらいである。ちょうど今、一冊の英書の全訳を終わって、ほっとして、手ずれたその原書と、訳稿とを前に感慨にふけているのだが、夜ふけて、また早朝に、ひとりこの机の上でじっくりと調べものをしている時、私の心の目にうつるのは遠い昔の恩師の姿である。カナダの婦人で、40 年を日本の女子教育のために働き、戦時中に本国で亡くなった篤^{とく}学者^{がくしや}だが、私の少女時代から今までを通じてもっとも深い感化を受けたと思う人の一人はこのブラックモア女史である。
2. 寄宿舎にいた私が、深夜、折々女史の部屋に電灯がついているのを見て驚いたことをおぼえているが、そんな時、彼女は英文学の学課についての調べものをしていたのだった。
3. あくまでも調べて正確な知識を得ようとすることを、私はその頃でもすでに若くはなかった女史の学究態度から学んだ。卒業後も英文学の研究から離れない、この長い年月の私の生活には、いつもブラックモア女史の幻がうつっている。そして女学生時代に受けた教えが心によみがえって来る。教育の偉大な力を私はブラックモア女史を思うたびに強く感じる。
4. 「すべてのことが忘れ去られた後に残る一つのもの、それが教育だ」という言葉がある。人格の感化をさしているのだろうが、あわただしく、雑事^{げんこう}に追われている主婦の生活の中では、かつての年月に学んだ知識は忘れ果てたとしても、教師の言行を深く心に刻みつけられ、生活の指導をその中から得ていることがしばしばある。「すべてが忘れ去られた後に残る一つのもの」の場合であろう。
5. 私においては、長い年月を変わらずに追求している学問の中に、勤勉に、謙虚^{けんきょ}にあくまでも学んでいた教師の感化を意識するのである。そしてその感化はたんに書斎の生活だけでなく、あらゆる面において生きていることを感ずる。教育は実に偉大な事業であることを私は感じつづけて生きている。

P180 ~ P181

[コメント]

児童文学の創作や翻訳家の村岡花子先生(1893 ~ 1968)の教育論。この文章ほど人の一生における教育の大切さをわかりやすく説いたものはない。「赤毛のアン」シリーズとともに先生のこのエッセイ集も是非御一読を。

— 2014 年 2 月 17 日 林 明夫記 —